

石丸文行堂 140 周年思い出エピソード 入賞作品

【最優秀賞】

タイトル：万年筆の絆

ペンネーム：むーむー

住所：埼玉県

四年前父と長崎に行った。お目当てはペンフェス。母の形見の万年筆が使えなくなり、修理しようと話したのがきっかけだ。そんな母は私が八歳の時に亡くなっている。以来、母の万年筆で父と交換日記をするのが日課となった。思えば母が亡くなった直後は毎日『さみしい』と日記に書いていた。父は父で『ごめんな』と返し、その字はいつも涙で滲んでいた。トラック運転手として働きながら、私を育てる苦労は計り知れない。だからこそ日記は親子のコミュニケーションでもあったし、慰めの場でもあった。

この日石丸文行堂を訪れると早速スタッフに使えなくなった万年筆を見せた。

「できたら修理してまた使いたいのですが」

父は頭を下げた。本当は直してくれ、と強く言いたそうだった。そうは言ってもペン先は大きく開き、インク詰まりを起こす。

「申し訳ないのですが……」

直せない。店員さんのまなさそうな表情にそう思った。

しかし母の形見であると伝えると

スタッフは丁寧に洗浄をしてくれた。インクも入れ替えてくれた。きれいに拭いてくれた。その一つ一つに思いやり。おかげで新品のようなツヤが戻った。

「もしかしたら少しだけ書けるかもしれません」

きれいになった万年筆。ゆっくりペン先を動かすとなんとインクが出た。それを見るなり、母が生き返ったように思えて、なぜだろう。涙が止まらなかった。

その日お揃いの万年筆を買って、長崎をあとにした私たち。交換日記もめでたく 30 冊目に突入。『かく』は『かぞく』の大部分。これからも万年筆で父に感謝の思いを綴っていききたい。

【優秀賞】

タイトル：えがおも包まれて

氏名：西 有加

住所：西彼杵郡

私は友人のプレゼントを買うために、長崎県、長与町にある石丸文行堂にいました。当時2歳の娘も一緒です。石丸文行堂に行くと、娘は脇目も振らず、ベビー用品コーナーへと直行します。肌ざわりのいいタオルや、木のおもちゃ、かわいらしいデザインのスタイ。親が見ても楽しい、ワクワクする品物が並んでありますから、子どもならばなおのことでしょう。

その日も飽きるまで眺めてもらってから買い物をしようと、ベビー用品コーナーで娘を待っていました。ふとお隣に、60代くらいのご婦人がいらしたではありませんか。娘が邪魔にならないかしらと、娘を連れ、ベビー用品コーナーから離れようとしたその時です。ご婦人から

「あのね、息子夫婦に赤ちゃんが産まれたのよ。プレゼントを渡したいのだけれど……。私たちのころと今じゃあ、いろいろと違うでしょう。もう困ってしまって。何がいいと思う？」

と、声を掛けられました。

私はおめでとうございます、とお伝えしたうえで、

「バスタオルはどうですか？この肌触りのいいバスタオルなら、とっても嬉しいと思います。おくるみにしたり、お昼寝するときに掛けたり敷いたりできますし、万能ですよ」

と答えました。

我が家も娘が産まれたとき、お祝いに、と似たバスタオルを頂戴し、本当に重宝したものです。ご婦人は

「ではこれにしましょうね。ちょうど小さなお子さんがある方にお尋ねできてよかったわ！ありがとう！」

と満面の笑みで、バスタオルを手にレジへ。レジでも

「孫が産まれてね、そのプレゼント用に……」

とプレゼント用の包装をお願いされており、店員さんも

「それはおめでとうございます！」

と笑顔でした。

(娘が産まれたとき頂戴したものたちにも、こんなふうに、多くの笑顔が含まれていたのだろう)

と、その様子をあたたかな気持ちで見っていた私。

みんなの笑顔が一緒に包まれた贈りものは、受け取った息子さんご家族の未来を祝福してくれたことでしょう。

【優秀賞】

タイトル：素敵な便箋を求めて

ペンネーム：岬とうこ

住所：島原市

「コン前の浮世絵の手紙、洒落とったあ」

電話の向こうで、おばの甲高い声が響く。

三十代後半で関西から島原市へUターンした私。社会へ出てから週に一通、ひとり暮らしのおばへ手紙を出してきた。

雲仙市のおばの家まで車で一時間。月に一度は顔を出すし、目新しいネタもそうはない。正直書くのが面倒なときもあったが、気づけば長年の習慣になっていた。

こだわりは毎回便箋の種類を変えることと、記念切手を貼ること。近頃は百円ショップでも可愛い便箋を置いているが、上質で洒落たデザインのものとなると田舎では入手困難。

なので長崎へ行くと、必ず浜町の石丸文行堂を訪れた。明るく広々とした店内に並ぶカラフルな文房具や雑貨たち。見てまわるだけでワクワクし、顔がほころんだ。

(へえ～これがガラスペン。キレさ～)

(あ、おくんちグッズ！ 来月やもんね)

などと感心したり、カゴへ入れたり。最後に便箋コーナーへ向かうのだが、見目麗しい和柄や繊細であか抜けた洋風デザイン、ユニークなイラストつきのものなど種類が豊富で、毎回選ぶのにひと苦勞。買い込みすぎてお

サイフ的には「イタタ……」なのだが、受け取るおばや友人たちの顔を想像し、心がポカポカした。

昨年末、そのおばが亡くなった。享年九十四歳。五年前に脳梗塞で倒れ、一昨年島原市内の施設へ入所した。コロナ禍で面会もままならなかったが、手紙は継続。石丸文行堂で選んだ便箋セットは、車いす生活のおばを元気づけたようだ。

葬儀の朝、兄姉や甥姪の手を借りて大量の手紙を棺へおさめた。おばの家で大切に保管されていた私からの手紙。

(おばちゃん、これだけあれば天国で退屈せんよね……)

色とりどりの手紙と美しい花々に囲まれたおばは、ほほえんでいるように見えた。

その後も石丸文行堂を訪れている私。一番送りたい相手がいなくなってさみしいが、遠方在住の友人たちが手紙を待っている。これからも素敵なお便箋を求めてお世話になりませう！

【優秀賞】

タイトル：石丸文行堂さんと私

ペンネーム：もちやりす

住所：佐賀市

「そうだ、インクを買いに行こう！」

と思いついた時に私が最初に思いつく場所は、地元にある石丸文行堂さんである。

私がインクやガラスペンを初めて購入した場所であり、週に一回以上は通う楽しいアミューズメントパークのようなものだ。

もともとガラスペンという存在に憧れを持っていた私。だがしかし、ガラスペンは敷居が高いという勝手なイメージがあり購入はしたことがなかった。

当時二千円のガラスペンを、店員さんに買いたいというまでにもだいぶ悩んだものだ。ショーケースに並ぶ彼らを見て帰ると言うパターンを何回も繰り返した。

「よかったら試筆しますか？」

ある日、そんな私を見かねてなのか。優しい店員さんがガラスペンの試筆をさせてくれたのだ。あの時の喜びと緊張感は今でも忘れられない。その一言がなかったら、私はガラスペンを触ることもできなかったかもしれない。

初めてインクをつけて渡されるガラスペン。学生時代のリレーのバトンの時よりも手が震える。

すごい！書けている！思ったよりスラスラ書けるし、何より音がいい！楽しい！楽しいぞ！

書きながら興奮が止まらない。

一体私は何を悩んでいたのだろうか。私はすぐに購入を決めた。こうして始まりのガラスペンが私の手元にやってきたのである。

私はガラスペンを使うようになって、手書きの文字を綺麗に書きたくなった。机に向かう姿勢を正すようになった。友人たちにお手紙を書いてみたくなった。素敵な文字を SNS で探すようになった。自分で美しい文字の練習を試みたりもした。

以前の何倍も手書きにこだわるようになった。

こういうちょっとした変化が、私の毎日を大きく変えてくれた。

あの時店員さんに声をかけてもらえたから、手に入れることができた毎日である。

私はこれからも書く。手書きで。

きっとそれは変わらないのだろう。

新しいインクがでたらウキウキしてお店へ行き、何も用事がなくてもちょっと覗いてみたり、自分のご褒美に少しだけ豪華な買い物もすることだろう。

こんな風に、毎日が彩られた生活が私は幸せだ。

【特別賞】

タイトル：手紙の達人

氏名：中村 崇士

住所：埼玉県

新幹線の通っていない島根に暮らしていた私が、電車やバスの乗り継ぎに重ねる乗り継ぎで、長崎の祖母の家へ遊びに行くときに、いつも連れて行ってもらった石丸文行堂。「おばあちゃんは家に何も無いから、新しい文房具を発見しに行こう」と誘ってくれましたが、長崎はどこを見ても美しく、兄と私は、あらかじめ、貧しい祖母に新しいものを欲しいと言わないという約束をして会いに行ったものです。しかし石丸文行堂はどうしても私たちには魅力に満ち満ちた雰囲気漂っていて、夏休みの宿題の読書感想文に使うにはもったいないような原稿用紙を買ってもらいました。

書道セットやランドセルなど、祖母は私たちの記念となるものを買ってくれて島根に送ってくれました。私は島根の小学校では見つけることのできない石丸分行堂の印の入った最新のランドセルを背負って、自慢をしていたものです。祖母は被爆者手帳を持っていて、首にはやけどもありました。しかし原爆症の被害は意外に少なく、後年ガンで亡くなる直前まで意識もはっきりしていて、石丸文行堂の便箋に素晴らしい字で手紙を送ってくれました。

私たち島根に暮らす家族と祖母との連絡はいつも手紙でした。旅行先からもたくさん手紙を書き、私たちもいつの間にか手紙の達人になりました。電子メールが主流となった現在でも「実はこんなことを考えているんだよ…」というような、ちょっと特別な手紙を家族間に送るときには、手書きの手紙を使います。なんせ祖母は毛筆の達人で、大きな展覧会でも受賞するほどでした。愛宕に暮らしていた祖母は、中学校しか出ていませんでしたが、本もよく読み、書の道具にもお金を惜しまないような人でした。

私は今やオランダ語や英語でもすらすら文章を書くことができるようになりました。しかし、大事なことがあるとき、やはり手書きの手紙を書くんだということを祖母が知ったら、とても喜ぶと思います。祖母の墓参りに行くほか、長崎にも石丸文行堂にも疎遠になっている私は、今再びあの便箋セットで書いてみたいという気持ちになっています。

【特別賞】

タイトル：私と石丸文行堂

ペンネーム：よちよちペンギン

住所：長崎市

私は今年で22歳になります。思い返せば保育園に通っていたあの頃から、身の回りには石丸文行堂の文房具がありました。クレヨン、クーピー、色鉛筆、絵具、鉛筆、シャープペンシルなど歳が増すごとに使う文房具は変わっていききました。

今となっては文房具の購入頻度は減ったものの、レターセット・手帳・熨斗袋などを購入しております。自分の成長とともに買うものも変化していきますが、今も昔も欲しいものは石丸文行堂にあります。友達、家族など身近な人への誕生日プレゼントとしても利用しています。新しいもの・昔は買えなかったものを見て回るのはドキドキしてとても楽しい時間です。浜町の店舗で「何を贈ったら喜ぶかな」と考えながら階段を上っている時間も、私にとっては言葉で表せないほどの幸せを感じています。

中学生のころ、後輩たちから石丸文行堂のラッピングで包まれたボールペンをいただきました。高校では授業や試験勉強で、今では仕事で毎日使用しており、今でも大事な物としてポケットに入れて持ち歩いています。人と人を繋ぐ文房具は、持っている人の生活に寄り添って何年も使われているということ、この文字を書きながら感慨深い気持ちに浸っています。

短文となりますが、一感想として送らせていただきます。

いつもありがとうございます。

【特別賞】

タイトル：お気に入りの「印鑑」

ペンネーム：水色の印鑑ママ

住所：愛媛県松山市

私は、子どもの頃から文房具が大好きだった。玩具より文房具、お菓子より文房具、という子どもで、一日中、文房具を見るだけで過ごせていた。と母は私の子ども時代を語る。何よりも文房具が好きな、少し変わった子どもだったのかもしれない。

小学生になると、最先端の文房具を見つけては買ってもらっていたので、クラスのみんなから羨ましがられていた記憶がある。私をクラスの人気者にしてくれていた文房具に、今でも感謝している。

私がよく行っていた文房具屋は、ゆめタウンの中にある石丸文行堂だった。二年前に結婚し地元を離れたので、今は地元に戻った時にしか行けなくなったが、今でもお世話になっている文房具屋だ。

そんな石丸文行堂に、人生で一番お世話になった商品は「印鑑」だ。金融会社に就職した私は、予想以上に印鑑を使うことが多かった。伝票や受付票、あらゆるものに押印しなければいけなかった。こんなにも印鑑を必要とすることが多いとわかっていなかった私は、自宅に昔からあった、親のお下がりのような少し汚れた印鑑を使っていた。

入社二週間経つか経たないかの時に先輩が、とても使いやすそうで高級感のある印鑑を持っていることに気が付いた。しかも色はシルバーがかったピンクで見た目も可愛く、どこで手に入れたのかを尋ねると「石丸よ、ゆめタウンの中の」と教えてくれた。私は早速、仕事が休みの日に母と印鑑を注文しに行った。字体を選ぶのも楽しく、母と相談しながらあれこれ迷いながら決めた。店員さんが、どれが人気なのかなどを細かく教えてくれて、とても親切丁寧だったことを覚えている。当時の私の名字を旧字体で作ると、追加料金がかかると言われたが、ずっと使うものだし納得のいくものを作りなさい。という母の言葉もあり、私は納得のいく、一生大事にしたいと思える印鑑を作ってもらった。色は、ピンクが良かったが、先輩と被らないように水色にした。今までピンク以外の色を選んで来なかった私だが、シルバーがかった水色はピンクより綺麗に思え、最高に気に入った。出来上がった印鑑は、キラキラと輝いていた。印鑑が気に入ると、自然と仕事も意欲が増し、良い業績を出せるようになった。こんなにも印鑑に感謝している人は、私が日本一ではないかと思っている。

金融会社を退職し、次のホテル業界でもまた頻繁に印鑑を使う仕事だった。同僚に「良い印鑑だね。どこで買ったの？」と質問され「ゆめタウンの中の石丸ですよ」と伝えると、同僚はすぐに注文していた。「ちょっと高かつ

たけど、高いだけの価値あるね」と言っていて同僚も石丸文行堂の印鑑を気に入っていた。

転勤を繰り返した金融会社時代、どこに行くのもいつも一緒だった大事で大好きな印鑑。ホテル業界でも大活躍してくれた印鑑。二年前から専業主婦となり、今は毎日印鑑を使う生活ではなくなったが、私の大事なもののボックスに宝物のように入れて保管している。子育てが一段落してまた働く時には、またこのお気に入りの印鑑を使う仕事がしたいと思っている。

こんなにも素敵な印鑑に出会えた私は幸せだ。石丸文行堂の印鑑と出会わせてくれてありがとう。

【特別賞】

タイトル：合言葉はイシマル

ペンネーム：野原すみれ

住所：長崎市

今から約20年前、小学6年生を頭に4人の息子を核家族、転勤族、夫婦とも正規職員の中での育児中の事です。土曜日の朝、溜まったホコリと洗濯物と私のストレス。ギャーギャーと狭い部屋で兄弟げんかを始める子供達。「やめなさい」と、怒鳴る私。もの凄い形相の私に怒りと怯えた8個の目が一斉に見上げます。不機嫌が頂点に達した私を横目で見ながら夫は、ちょっと探し物をした後に子供たちに「浜の町に行くぞ」と声を掛けます。小学生の上2人は自分の自転車で下2人は夫の自転車の前と後ろに乗せて浜の町を目指して出発して行きました。

一人、家に残った私は一つ大きな息を吐きました。「浜ブラコースなら2時間かな」とつぶやきながら、部屋の雑巾がけ・洗濯物干しと、体を動かしていきます。

その内にストレスの塊も雲母をはがすように少しずつ小さくなり、2時間後「ただいま」と、元気に子供達が帰ってきた時にはにっこり笑って「おかえり」と声かけられる精神状態になっていました。浜ブラと言えば、ケーキ屋さんと子供が興味を示す学用品が多彩にある石丸文行堂が、その頃の我が家の定番コースでした。

その日の午後、下の子を寝かしつけた後、土曜日でも残業に出かける夫が紙の包みを取り出し、テーブルの上に置きました。「石丸のメルシー券を子供たちに渡して、選んだよ」包みの中身はピンク色の蛍光ペンです。夫は「お母さんを笑顔にする魔法がかかっているよ」などと、言いながら・・・選ばせたのでしょうか。「なぜ、蛍光ペンだったのか」今となっては謎ですが、思い出すと一瞬至福の甘い記憶と笑いが蘇りました。

あれから20年。4人の息子がいれば、順風満帆な日々ではありませんでした。原因不明の病気で入院、生まれつきの骨の異常で手術、高校の時の謹慎、就活うつからの引きこもり・・・等々。その度に夫婦という名の戦友とは、多くを語らず荒波を乗り越えてきました。時々行く、浜ブラの定番コースを楽しみにして。

そして、4月に一番下の息子が無事に就職し、初給料で買ったケーキとカードを渡されました。カードには、「ありがとう」とだけ書かれていました。「カードはイシマルで買ったよ」と少しはにかみながら話してくれました。そうなのです。子供たちはあれからもずっと石丸文行堂で学用品などを購入し、成長して行きました。我が家の大事件も起きない代わりに日常生活に寄り添ってくれた石丸文行堂。これからも戦友と共に家族の歴史を重ねていきたいと思います。

【特別賞】

タイトル：大好きな文房具

氏名：別所 飛鳥

住所：長崎市

私は、2008年生まれで、もうすぐ15歳です。(6月15日生)幼稚園の時からクレヨンにはじまり今は、亡くなった大好きなおじいちゃんや両親に、何でも買ってもらっていました。

小学生になってからは、文房具が大好きで“マスキングテープ・ボールペン・シャープペンなど数えきれません。木のボールペンは、両親よりお祝いで買ってもらううれしかったです。

今、中学3年生ですが今も大好きすぎて、おこづかいは、文房具代に消えていきます。

新商品は、ホームページや石丸文行堂でチラシをいただいて見えています。

ほしい商品は、予約をしたり、お店をのぞいて買っています。

今は、絵や習字を習っているので、絵の具や筆・半紙も買ったりしています。

これから、万年筆やガラスペンを買えたらいいなあと思っています。

ポイントは、母のスマホを使ってゴールド会員ですが、プラチナ会員になるのが楽しみです。

私もポイントカードを作りました。

学生割りで買えるので助かります。

以前まであったメルシー券を集めるのも楽しみの一つでした。

私は、么カ稚園の頁からほとんど毎週石丸文行堂本店を訪れています。

石丸文行堂は、私にとってお気に入りのお店です。その他にもイベント(ワークショップ)がある時は、訪れています。

以前、水辺の森公園で開催されていたイベントで文房具のつかみ取りやくい引きも楽しかったです。

また、このようなイベントが開催されることを楽しみにしています。

来月開催されるごほうびフェスタが待ち遠しいです。

私は文房具が大好きで、文房具にかこまれて仕事がしたい、それが私の夢です。

石丸文行堂さんで働きたいです。

これからも毎週訪れたいです。

別所 飛鳥

【特別賞】

タイトル：3つの人生初めて

ペンネーム：ちゅんちゃん

住所：長崎市

「3つの人生初めて」

創業140周年 おめでとうございます！

今から丁度40年前の冬、私の高校では
職場体験があり、私を含む同級生3人は
石丸文行堂でした。

記憶にあるのは、1階入口入って右奥にあった
年賀状コーナー。どんどん売れていく絵ハガキの陳列
棚下の引き出しから補充していた所「あはただた
のぬ！ ギョウギョウに入れたらダメよ！

お客様が取りにくいし、戻しにくいでしょ！」と
当時は叱られたように感じました(笑)がご指
導頂いたことをこんなに時が経っても覚えています。

最初は、どうしたらいいのかわからないのか、何をしたらいいのかわ
からないな、早く終わらなさいか、早く終わらなさいかと思いつつも
必死に出来る事を探したような。帰りが近
づく嬉しく思った時の事を子供達が勤め初め
たときの最初の小遣みに答えたものです。

40年の時は経ても若者の初めての仕事は皆同じ
なっただけと感じたものです。

①

2

初めて「働く？」と言えるものなのかは微妙ですが(笑)、② 初めてのお給料も頂きました。

当時の時給は、400円か ~~420~~420円くらいだったかな。喜んで帰って我が家の習慣であった

③ お給料を神棚に 初めて供え、父母と3人で「ありがとうございます」とお礼を言いました。

私も昭和に生まれ平成、令和と時代は変わってもずっと石丸文行堂での時間は忘れられせん。

そろばん、和文タイフ等の資格を取るため土、日も休みなく学校に通っていたのがまるで時代劇の世界の話のようで……。

職場体験はたったの2週間、それと2週間の貴重な経験が卒業後最初の就職先となった観光地というサービス業で10年働くきっかけになったのかなあと思います。

30年前の職場の後輩の結婚の際には表紙がそれぞれは立派なしゅうかされたアルバムを贈りました。もちろん石丸文行堂で買ったものです。1万円だったと思います。

と、いうように事あるごとに石丸文行堂での思い出話を家族にしています。

主人も職場で配られたボールペンではなく、石丸でお気に入りマイボールペンとマイボールペン芯等を取り寄せる事もみります。

社会人になった子供達にも「使い易いぞー！このこんな所がいいぞー」とうとうしくらしいの細かい説明付きで勧めていますが、それでも振り向かない時は「使ってみろ！書いてみる！試してみろ！」と半ば強制的(笑)に会話が続きます。家では文房具大好きハハと呼ばれています。新商品や便利グッズもチェックしています。

今週6月9日私達夫婦は真珠婚式(30年)を迎えます。天皇皇后両陛下御成婚の日に合わせて結婚しました。この記念に石丸文行堂で何か買ってみよう……。ついでに手ぬぐいも数枚趣味のタペストリー用に今度一緒に汐の町と夢彩都にメルシー券も持って出かけてみようと思います。楽しみです。

最後になりましたが 石丸文行堂様
その節は大変お世話になり ありがとうございます。

今更なからですが お礼をお伝えできるチャンスが
40年も経った今 頂いた事に感謝致します。

これからも 観光地長崎の顔
漢の町アーケードの 真ん中で輝き続けて
下さいね!

【特別賞】

タイトル：どんな時も石丸文こうどうと

氏名：橘 咲良

住所：熊本県

どんな時も石丸文こうどうと

たちばな さくら

私の、おじいちゃん、おばあちゃん、長崎にすんでいて、おじいちゃんたちと会いに行く時は、かならずはまやに行きます。

そして私は、はまやに行く前に、かならず石丸文こうどうに行っています。

ようち園の年長さんの時、私はおじいちゃん、おばあちゃん、お母さんとあこがれの、ランドセルをさがしに行きました。

ほかにもいろいろなお店に行、たけど、どれもお気に入りませんでした。するとお母さんが、「石丸文こうどうに行ってみよう。ランドセルが売っているのを見たことがあるよ。」と言いました。そして石丸文こうどうに行ってみました。

行ってみると、かわいい、ししゅうがある、むらさきのランドセルがありました。私はそのランドセルがとても気に入りました。すぐに買ってもらいました。とても、うれしかったです。

そして、ふでばこも買ってもらいました。むらさき色でも気に入っています。私は、人生に1どのランドセルを買うという行事を石丸文こうどうでできて、よかったと思います。三年生の時、私はスタンプを買いました。とてもかわいくて、今もたくさん使っています。それを買う時、私は千円さつだけ出しました。すると、女の店いんさんが、「百円玉があると、出せるよ」と、やさしく教えてくれました。そして、おつりが少なくなりました。石丸文こうどうの店いんさんは、みんなやさしい人だなと思いました。これからも、石丸文こうどうといっしょに大きくなっていきたいと思いました。

【特別賞】

タイトル：誰かの記憶に残るもの

ペンネーム：相良未佳

住所：長崎市

小さい頃から絵を描くことが好きだった私にとって、石丸文行堂の画材コーナーはとても魅力的でした。小学生の時にはミリペンやアルコールマーカー、アクリル絵の具など、足を運ぶ度にお小遣いで何かを購入していたものです。中学生で漫画家を目指そうと思った時に、原稿用紙とつけペンとペン先、スクリーントーンを買い揃えたのも石丸文行堂です。その時には友人も、私の誕生日に石丸文行堂の袋に包まれたスクリーントーンをプレゼントしてくれたことを覚えています。高校生になる頃には、画材コーナーで開催されていたイラストコンテストやカードサイズのイラスト交換企画にも参加した思い出があります。私に絵を描くきっかけと、地元長崎にいらっしゃるイラストや漫画を愛する方々との出会いをくれました。その時描いた作品は今でも自分で気に入っており、宝物です。私には大学進学で長崎を離れ、しばらく石丸文行堂に通うことができないう時期がありましたが、就職のタイミングで長崎に戻ってきました。その時に立ち寄った石丸文行堂は変わらない姿で私を迎えてくれました。私は今も絵を描くことを続けています。漫画家になる夢はまだ叶っていないけれど、誰かに読んでもらえるように、長崎でまだ漫画を描き続けています。幼い頃の私がワクワクしながら画材を選んだような、思い出のお店が変わらずに残っているからこそ、私も変わらず自分の好きなことを追いつけられていると感じます。私の人生を日常生活の文房具だけでなく、趣味のツールとして豊かにしてくれる石丸文行堂のことがこれからも大好

きです。私が石丸文行堂で購入した紙とペンで描いた物語が、石丸文行堂と同じくらい歴史と誰かの記憶に残るものになるといいなと思います。

【特別賞】

タイトル：わたしと石丸文行堂

ペンネーム：一璃（ちあき）

住所：長崎市富士見町

私が石丸文行堂様に足を運ぶようになったのは、学生の頃「マンガ家になりたい」と思ったのがきっかけでした。当時文房具店は行動範囲内に何軒かありましたが、原稿用紙・つけペン・インク・スクリーントーン等の「漫画を描くための道具」が揃う文房具店は石丸文行堂様以外にありませんでした。

現在ほど通信販売も便利ではなかったもので、少しだけ遠出をすれば漫画を描くための道具を直接見て選んで購入できる、というのは学生時代本当にありがたい存在でした。

それから時間が経ち—

数年前から万年筆インクに興味を持った私は、色々調べるうち石丸文行堂様がオリジナルの万年筆インクをたくさんたくさん発売していることを知りました。

（余談ですが、その頃「地元の大きな文房具屋さん」という印象だった石丸文行堂様が、全国的に有名なお店を肩を並べる規模だということを知り驚きました）

まだ興味を持ったばかりのときに万年筆コーナーに足を踏み入れた際、対応してくださった店員さんが親切かつ話術巧みに万年筆インク沼へ誘ってくれたのが印象深く、専門分野を担う方はすごいな…と思ったことを覚えております。

（その店員さんのお名前は失念してしまいましたが、当時は大変丁寧にお話をしていただきありがとうございました！）

時折石丸文行堂様で開催されるイベントでは足を運んだことのない地域のご当地インクを購入したり、自分のオリジナルインクを作る体験もさせていただきました。

そういった出来事を経て今では「ご当地インク」に惹かれ、旅先にご当地インクを扱う文房具店があれば立ち寄り、自分用のおみやげ（思い出）として1色選んで購入するのが楽しみのひとつになりました。

長崎という土地は正直都会ではなく、なにか専門的なものを求める場合必ずといっていいほど都会の方まで足を伸ばすこととなりますが、住んでいる土地で入手できたり体験できたりするのは本当にありがたいことだなど、学生時代に感じたありがたさを大人になって改めて感じました。

学生の頃も大人になってからも、趣味においてすこし特別なものを欲したときに力になってもらったのは石丸文行堂様だったなと思っています。

先のことはわかりませんが、また何かに興味を持ったときには石丸文行堂様を頼るんだろうな…

【特別賞】

タイトル：重なる偶然

ペンネーム：みちくさ

住所：福岡県那珂川市

20年以上前の話です。私は松浦市の障害者福祉施設で働いていました。言葉でのコミュニケーションが苦手な利用者さんが多い中、その方が望まれている事を考えながらサポートする事に充実感を覚えながら、身体と頭をフル稼働してしていました。今思えば若気の至りで、全力でがむしゃらに取り組んでいたように感じます。

しかし当時、福祉の資格を何も持っていなかった私は、勤続年数が2年を超えた日、上司から、とある民間資格が取れる事を教えていただきました。

それまで資格の有無など関係ないと感じていた私でしたが、何故かその時は無性に『この資格を取りたい!』という想いでいっぱいになりました。

そこからは仕事が終わったら帰宅してすぐテキストと向かい合い食事と寝る時以外はペンを片手に猛勉強、、、といったスキルは私にはなく、あまり自信が無いまま試験当日を迎えました。

会場は長崎市の2~3階建のビルだったように記憶しています。早朝からのバスで会場に早めに着いた私は、さっそく一夜漬けのおさらいをしようとしたのですが、筆記用具を忘れたことに気がきました。幸い1時間早めに到着していた為、時間に余裕があった私は文房具屋さんへ買いに行こうと考えたのですが、当時はスマホなど無かった時代。試験会場のスタッフさんに尋ねると、石丸文行堂さんを教えて頂きました。

買っておいた長崎市の地図を見ながら、無事に店舗に到着し、入店。田舎者だった私は、ペンの種類の多さを眺めているだけで、恥ずかしながらしばらく店内で"旅行気分"を味わっていました。そんな中ふと、横に女性がいることに気がきました。目があって何故か軽く会釈をしてしまい、変な体温の上がりかたを自覚しました。そこから鉛筆と消しゴム、缶ペンケースを買い、すぐに店を出て試験会場へ戻りました。

驚いたのはその後です。先ほど石丸文行堂で会った女性が、さっきと同じ角度の会釈をして私の横に座ってきたのです。吹き出る汗を無視しながら挨拶をし、できる限り自然に、会話を始めました。なんと女性は福岡から試験に来たとの事で、私と同じく早めに到着したのでブラブラと歩いていたらなんとなく石丸文行堂さんに寄った、という状況を教えてくれました。

試験の出来栄えはというと、緊張が高まり過ぎてとてもとても自信があるとはいえないものでした。そして当然のようにその女性とも軽い挨拶をして、別れました。

しかし帰りのバスを待っている間、自分でも不思議なくらいに『あの人もう一度会わなくては』という胸の高鳴りを感じていました。しかし20年前、LINEやインターネットはもちろんありません。諦めるしか無い状況のはずだったのですが、『私〇〇という施設の職員で…』と名刺をもらっていた記憶が電気のように脳内を走りました。慌てて財布を探り、相手の勤務先の電話番号を確認。

翌日の午前、私はドキドキしながら女性の勤務先へ電話しました。そしてそれから女性と連絡が取れるようになり、電話で毎日のように話すうちに、キャンプで食材係をしたこと、背中にアザがある事、好きな歌手と楽曲、などなど様々な事が、偶然とは思えないくらい同じだったのです。

そこから2年後、女性は私の奥さんとなりました。今は結婚20周年も超え、幸せに暮らしております。あの時、石丸文行堂さんに行ったこそ、出逢いです。